

# クックリット『王朝四代記』にみる ピブーン政権（1938～44）服飾政策への女性の意識

加 納 寛

## はじめに

タイにおいて人民党による立憲革命（1932年）の流れを受けて成立したピブーン政権（1938～44年）は、国民国家建設の一環として積極的な「文化」政策を展開していったが、中でも服飾政策は「文化」政策の重要な柱の一つであった<sup>1</sup>。ピブーン政権の服飾政策は、従来のタイに見られたパー・チョークラベン<sup>2</sup>などの服飾を非「文明」的であるとして否定し、帽子着用を含めた西洋式服飾を国民に強要していくものであった。

従来の研究は、このピブーン政権の一連の服飾政策の結果を、タイ服飾史上の一大転換期として扱ってきたが<sup>3</sup>、加納は、バンコクの若年層女性を中心とした洋装化の普及はすでに1930年代に観察され、ピブーン政権が服飾政策を展開した1940年代前半と1930年代との差は政権が強硬

三二六

1 詳しくは、加納 [1999]、ピヤワン [2007] を参照されたい。

2 パー・チョークラベンとは、通常長さ3m、幅90cmほどの布を用いた腰衣の一形態である。膝下少しばかりまでを覆うような丈に調節して布を胴に巻きつけ、前面で布の端を棒状に巻いて股の間を通し、背骨のところに差し込む。男女ともに使用する。

3 たとえば、ทองวัฒนะธรรม [1960]、เฮนิก [1982:110-121]、สุวิทย์ [1993:96-145] などが先行研究として挙げられる。詳しくは、加納 [1999: 56-57] を参照されたい。



左から、『シー・ペンディン』（サヤームラット社1988年版）4巻本、2003年テレビ・ドラマ『シー・ペンディン』VCD41枚セット、日本語訳書『王朝四代記』5巻本

に押し進めた帽子着用を除いて必ずしも大きくはないことを指摘している [加納 1999]。しかし、政権によって服飾を強要された側の人々がそれをどのように意識していたかについては、公文書のような史料の中から読み取っていくことはなかなか困難である。

本稿は、文学作品を用いながら、政府が強要した服飾に対する女性たちの意識を垣間見る手掛かりを探ろうとする試みである。

本稿で扱うのは、クックリット・ブラーモート (ม.ร.ว. คึกฤทธิ์ ปราโมช) 『シー・ペンディン (สี่แผ่นดิน: 四つの御代、邦題：王朝四代記)』<sup>4</sup>である。『シー・ペンディン』は、1951年から翌年にかけて日刊新聞サヤームラット (สยามรัฐ) 紙に掲載された連載小説であり、ラーマ5世期 (1868～1910)

4 本稿では、1988年に出版されたサヤームラット社版を使用した。4巻本のセットであるが、ページは通しで付与されており、本稿内の引用にはその通し番号によるページを用いた。訳文は拙訳による。

5 たとえば吉川 [1982] は、「通俗に墮する嫌い」や作者の王族としての視点による「志向」性を指摘しつつも、「歴史、風俗、習慣、そして文化のあらゆる領域にまたがる「総合資料」として評価している。

から8世の崩御（1946）までの「四つの御代」を背景として、様々な歴史的事件を織り込みながら主人公の女性プロローイの一生を描いた物語である。この小説はタイにおける歴史大河小説の代表作の一つであり、2003年までに5回もテレビ・ドラマ化されているほど人気のある作品である。『シー・ベンディン』の歴史的事件を巧みに織り込んだリアリズムは高く評価されており [Mattani 1988:79]<sup>6</sup>、この作品を通じてタイの近代における変化を描き出そうとした論文も数多い<sup>6</sup>。

著者のクックリットは、1911年生まれの上流階級であり、1995年に死去するまで、政治家、ジャーナリスト、評論家、小説家として広い分野で活躍した。1934年にオックスフォード大学を卒業後は国税局や銀行に勤務し、1946年以降は政治家として活動したが、クーデタによってピブーン内閣が復活すると大臣の座から退き、1949年以降は多くの小説を発表していった。1975年には総理大臣となるが、1年たらずで選挙に破れ首相を辞任した。

『シー・ベンディン』の主人公プロローイは、1882年に高級官僚の庶子として生まれたが、幼くして王宮に仕え、後に華人系の高等文官プレームと結婚して家庭を築いていった。側室の子を含めて4人の子供に恵まれるが、折しも1932年の立憲革命に巻き込まれ、子供たちは政治に翻弄されていく。第2次世界大戦の終結による安穏も束の間、1946年、ラーマ8世崩御の報とともにプロローイも息を引き取る。

1953年刊行の初版本に付した「まえがき」において作者は、『シー・ベンディン』の執筆にあたり正史に残らない「人生と生活に関する詳

6 たとえば、『シー・ベンディン』を通じて価値観の変化を跡付けようとした Mattani [1988] や、近代女子教育の変遷を追った平松 [2008] などがある。また、高橋 [2007] はタイにおける第2次大戦の「記憶」の一つのあり方として本書を利用している。一方でサーイチョン [สุวิมล 2007] のように、本書を絶対王制期を理想化した政治的な「タイらしさ」を「捏造」したものとして捉える見方もあるが、サーイチョンも服飾面での描写に関する「捏造」については指摘していない。

7 チャムルーンは、自分の葬儀において『シー・ベンディン』を配布するよう遺言を残したという [สุวิมล 1991: (10)]。

細」を記録する意図をもって描いたと語っている [ศิริพันธ์ 1953: (2)]。そのためにプロローイが「何色の布を着用したかということまで」時代考証に意を尽くしたという [ศิริพันธ์ 1953: (2)]。プロローイ像については、クックリットが「尊敬する多くの女性、とくにプロローイと同世代の親戚の女性」を参考にして描いたもので [ศิริพันธ์ 1991:9-10]、中でもチャムルーン・プラストスバキット (คุณหญิงจางาเรญ ประเสริญศุภกวี) は、プロローイ像にかなり近い人物であったという<sup>8</sup>[ศิริพันธ์ 1991:9-10]。こうした人物造形は、当時のタイ人に現実感をもって受け入れられ、新聞連載中にプロローイがマンゴーを食べたいというセリフを入れると、マンゴーの季節でないにもかかわらず、すぐに読者から新聞社にマンゴーが送られてきたという [ศิริพันธ์ 1991:9]。もちろん文学作品に描かれた「事件」を歴史上の事実と認定することは不可能であるが、『シー・ペンディン』上の登場人物たちの意識描写が、作品に描かれた時代を生きてきた1950年前後当時のタイ人読者にある程度の共感を得ていたであろうことは想定されてよいであろう。

以下、服飾政策への反応を、1941年当時おおむね50歳以上であるプロローイ世代の老年女性たちと、1941年当時20歳代から30歳代であるプロローイの子供世代の若年女性たち<sup>9</sup>とに分けて見ていきたい。なお、『シー・ペンディン』に描かれる登場人物たちは、いずれもバンコクの中流階級以上に属する人々であり、本稿の対象もそうした限定を受けることになる。

## 1、「文化」と服飾政策展開

1941年に政府の「文化」政策が本格化し服飾政策が展開されていくと、『シー・ペンディン』にもそれに関連する描写が現れてくる。とくに『シー・ペンディン』において強調されているのは、帽子着用強要に関する政策

8 プロローイの子供たちは1906年から1914年までの間の生まれに設定されている。

9 「文化 (วัฒนธรรม)」という語は、1930年代以降に culture の訳語として造語された、きわめて新奇的な語であった [村嶋 2002: 247-250]。

である。プローイは、政府の服飾政策について、兄のプムから説明を受けるが、「文化」という語も何を意味するか理解できない<sup>9</sup>。ようやく、おぼろげながら「文化」の意味がわかるとプムに尋ねる。

「それで、私たちは、いったいどうやって手に入れるの？ その文化とか言うものを」

「帽子を被らなきゃいけないんだ」とプムが何でもないので顔を答えた。

「あら！ クン・ルワン<sup>10</sup>は何を言いだすのやら。子供が冗談を言い合ってるみたいだわ。それにしても私はまだ全然話が見えてこないわ。帽子がどこに関係しているのやら！」プローイが叫んだ。

「おや！ 本当なんだよ。プローイ」プムが笑いながら言った。「帽子をかぶったときには靴もはかなきゃならないんだ。まあ見ていなさい。面白くなるから」[อังกฤษ 1953:1107]

当時のタイにおいて、「文化」が服飾と密接に結びついた概念であったことがうかがわれる。しかし、プローイの認識では、なかなか「文化」と帽子着用とが結びつかない。

「どうなっちゃうか、判ったものじゃないわ。（何年か前も）帽子は誰も彼もみんなかぶったものよ。ブレードさんも孔雀尾帽に凝って、一枚いくらだって買っていたわ。クン・ルワン自身だってかぶってたじゃない。私は、今の子供や青年はあまり帽子をかぶってないってことだけは知ってるわ。かぶってもいいわよね。日除けにもなるし」

10 プムのこと。「ルワン」はプムの官等である。

「プローイはまだ全然判っていないね。男だけにかぶれて命令しているんじゃないんだよ。女性も帽子をかぶらなけりゃいけないんだ」プムが言った。

「女性がどうやって帽子をかぶれるのよ。それとも西洋の女性みたいに帽子をかぶらせるって言うの？」

「そういうことだろうね。プローイ」プムが答えた。

「娘たちは気に入るかもしれないわね」自分のことを棚に上げてプローイが言った。「今じゃ娘さんはもう西洋女性みたいに装ってるんだから。私は年取っててよかったわ。西洋女性みたいにならなくてもいいんだもの」

「どこがいいんだい」プムが遮って言った。「プローイだよ。君自身が西洋女性みたいにならなきゃいけないんだ。政府は娘さんだけだなんて少しも言ってないよ。娘さんも婆さんも後家さんも皆帽子をかぶらなきゃいけないんだ」 [Ånqvist 1953:1107-1108]

プローイは、帽子着用も男性の間での単なる流行だと思って軽く受け流している。しかし、プムの話から、帽子着用は政府の命令であるということが判っていく。この時も、プローイにとっては他人事としてしか意識されていない。男性なら、「日除けにもなる」から帽子着用も悪くないと思っている。女性も帽子着用政策の対象であると聞いたときも、若い女性のみが対象であると思い込み、当人たちは「気に入るかもしれない」と思っている。なぜなら、近頃の若い娘たちは、すでに西洋女性のように装っているからである。最後に性別や年齢を問わずプローイ自身も帽子着用政策の対象であることを知らされて驚いている。嫌がっても帽子着用から逃げることはできない。プムは言う。

「まあ、見てなよ」プムが喉の奥で笑いながら言った。「今後帽子をかぶらないものは誰も外出できないって言うのを僕は聞いたんだ」

「どうしてよ」

「ポリスが捕まえるって言うんだ」プムがぶっきらぼうに答えた。[အုၼ်ၼ် 1953:1108]

帽子を着用しない者は、警察に捕まるから誰であれ外出すらできないというのである。

それからというもの、帽子の話は驚くほど大きな話になって、皆それぞれ帽子のことだけを話すようになった。娘たちは座り込んで、どの型の帽子が美しく、どの型の帽子が流行にのっているかといった帽子の形について話し合った。帽子をかぶるのが好きでない人々も、帽子をかぶらなければならない煩わしさを語り合った。いろいろな店が、それぞれ騒々しく帽子の宣伝を競いあった。役所の方も、ラジオを通じて帽子が「タイ国を大国に相応しくする」のに重要であると説明して帽子の話題ばかりを談じた。[အုၼ်ၼ် 1953:1109]

世間は帽子の話題でもちきりになっていった。娘は流行についていくために、帽子が好きではない人はそれをほやくために、商店は帽子を販売して利益を上げるために、官庁は人民に帽子を着用させ「タイ国を大国に相応しくする」ために、それぞれがそれぞれに帽子の話題を取り上げたのである。

## 2、老年女性の服飾と意識

ブローイの親友チョーイは、ブローイが結婚して王宮を去った後も結婚せずに王宮に留まった。1930年代末になっても「昔のまま」すなわちラーマ5世期（1868-1910）のままにパー・チョークラベーンとパー・テープ<sup>11</sup>を着用していたようである [ສິຖຸນຳ 1953:1959-1060]。

一方、ブローイは、既にラーマ6世期（1910～25）に、長くイギリスに留学していた国王の意向に敏感であった夫の勧めにしたがって、パー・チョークラベーンに代えて巻スカート状外見のパー・シン<sup>12</sup>を着用し [ສິຖຸນຳ 1953:699-704]、西洋風に髪を長くのばして歯も白く磨いていた<sup>13</sup> [ສິຖຸນຳ 1953:640-643]。チョーイに比べれば早くから西洋的な装いをしていたことになるが、帽子は着用していない。

しかし、このような老年女性たちにも、ピブーン政権の帽子着用強要を含む服飾政策の影響は及んでいった。古い服飾慣習が残存していた王宮の女官であるチョーイさえも例外ではなかった。1941年の末から1942年の9月にかけてのある日、チョーイがブローイの屋敷を訪ねてくる。

チョーイは帽子を着け、パー・トゥン<sup>14</sup>を穿いた、文化にしたがった正しい着こなしで、手には包みを持っていた。 [ສິຖຸນຳ 1953:1111-1112]

チョーイは完全にピブーン政権の服飾政策に則った、「文化」的な装

11 乳房を隠すために巻く胸布。

12 タイ女性が着用する巻スカート。一枚の長方形の布を用いる。

13 ラーマ5世期の女性たちは、髪を短く切り、歯は嗜好品の檳榔子を噛むために黒かった。ラーマ6世によるこのタイ女性の服飾欧米化は、「国王信条」と呼ばれた [加納 1999: 58]。

14 パー・シンの両端を縫い合わせて円筒状にした巻スカート。



いに転換していたのだった。

このような服飾を、老年女性たちはどのように意識していたのだろうか。プローイは、帽子着用が自分にも強要されることを知って次のように語っている。

「私死にそうに恥ずかしくて、（帽子をかぶるなんてことは）とてもできやしないわ。まだ娘だった頃も田舎にいて野原や林に出るときだけにはかぶらされたこともあるけど。そんなのは今でも死にそうに滑稽で笑えるわ」 [အုပ္ပန် 1953:1108]

プローイは「恥ずかしくて」帽子などかぶることはできないと感じる。そこで「もう死ぬまで外出はしないと心に決め」ることになる [အုပ္ပန် 1953:1108]。娘のプラパイが自分の帽子を進呈しようといっても、プローイは頑として受け付けない。

「いらない！いらない！」プローイが叫んだ。「あなた一人だけ気遣いでいなさい。私を気遣いの仲間にしなくて頂戴！」  
「母上も」プラパイが機嫌良さそうに笑った。「なんて文化のないことになってしまったんでしょう。お気を付けあそばしてね。近いうちに警察に捕まりますわよ」 [အုပ္ပန် 1953:1108]

プローイにとっては、帽子着用はすなわち「気遣い」の所業だった。それに対して、自分は帽子を愛用している若いプラパイは、帽子を着用しないことは「文化のないこと」だといい、「警察に捕ま」ってしまうと冗談を言う。

プローイは、「帽子をかぶるように強制されてからというもの、私は全然外出していませんの」と姉のチューイにいい [အုပ္ပန် 1953:1109]、

帽子着用に加えて柀榔子の嗜好禁止の報に接するに及んでは「これは悪業ね！私はこれほどおかしな目に遭わなきゃいけないとは思わなかったわ。」と嘆くように〔ἄγγελος 1953:1110〕、帽子を嫌悪する余り外出をも犠牲にして、そうした運命に接した自分の「悪業」を嘆いている。

外出自体を控えることができた恵まれた環境のプロローイと異なり、多くの老年女性たちは生活のために外出しなければならなかった。プロローイの姉チューイは、医師である夫ルワン・オーソットの手伝いをしているが、1941年末から1942年にかけてのある日、プロローイの屋敷を訪ねてくる。

「あら！ チューイ様！ 西洋女性みたいに装って変ですわ。私、最初は誰だかわからなかったくらいよ」（…中略…）

「それよ。プロローイ。私自身も恥ずかしくて何日も外出なんてできなかったわ。でも、どうしたって私はあちこち行ったり来たりして糧を求めなきゃいけないのよ。じっと家に座っていたら死んでしまうわ。帽子をかぶるようになって言われたら、私はかぶらなきゃいけないの。でも指示に合う丁度いいのが一枚しなくて、ルワン・オーソットが買いに行ってくれたのよ。それで私も本当にかぶったってわけ。（薬をチューイの家に）買いにきた人なんか、腹の皮を振って笑ったんで、私も死んでしまうほど憂鬱だったわ。今日はあなたがとっても恋しくなったんで用事のついでに寄ったのよ。あなたも指示に合う帽子をもう持っているか聞きにね」〔ἄγγελος 1953:1109〕

チューイは外出して働かなければならぬために、政府の「指示」にしたがって帽子を着用しなければならなかった。当初は、何日も外出ができなかったほど「恥ずかしかった」という。チューイの店に来た客は

帽子を着用したチューイを見て大笑いし、チューイは帽子の着用について「死んでしまうほど憂鬱」に感じたのだった。

プローイの友人チョーイは、このような「憂鬱」を、乾いたヘチマを帽子に使うことで乗り切ろうとする。

「（この帽子は）乾いたヘチマなのよ。かぶっても軽くって、自分が帽子をかぶってるなんてこと忘れるくらい。そこがいのよね」 [အရှင် 1953:1114]

チョーイやプローイにとって、帽子というものは存在感が無ければ無いほどよいと考えられていることがわかる。

帽子着用は「煩わしさ」を伴うものでもあった。チューイは言う。

「でも、サームロー<sup>15</sup>に乗ったときには風に乗って流されてしまっ  
て、手でつかまなけりゃならないの。手で帽子を押さえ  
ると、今度は風が腰衣を下から吹いて広げちゃうのよ。も  
う文化なんてあったものじゃないわ。本当に大変よ」 [အရှင်  
1953:1110]

サームローに乗ったときには、帽子が飛ばないように手で押さえなければならぬが、そうすると腰衣の裾が開いてしまうのだ。これには、チューイも「文化なんてあったものじゃない」とこぼし、「文化」政策のために着用した帽子が、今度は「文化」を阻害しているとはやくのである。同じ問題にはチョーイも直面するが、チョーイは工夫によってこの問題を解決している。

15 三輪タクシーのこと。

(チョーイは) 帽子の脇に巻いて留めてあった2本の長い紐を解いた。2本の紐は、普通に顎に結ぶよりも随分と長かった。そして、チョーイはプローイを呼んで見せてから言った。「これよ、プローイ。これを見て。(…中略…) この紐は、指導者閣下(ピブーン)に従うように帽子を押さえるためのものなの。どこかに飛ばさないように。車に乗ったときには、この紐を解いて垂らして手でつかむんだけど、紐が長いから、私はその手を使ってパー・トゥンが開かないように押さえるのよ。一本の手で2つのことができるの」[ສິຖຸນຳ 1953:1117-1118]

チョーイは自己の独創性を十分に発揮し、帽子の紐の改良によって腰衣の裾と帽子の両方を押さえるのに成功したのである。

では、老年女性たちは帽子に対してプラスの評価をすることはなかったのだろうか。チューイは、帽子の効用について次のように語っている。

「本当は帽子をかぶるっていうのもいいことなのよ。私ののように大きければ、日光も防げるし」[ສິຖຸນຳ 1953:1110]

チューイによれば、日光を防ぐことができるというのが、帽子の一つの効用である。服飾品としての美しさや、政府が喧伝するような「文化的であるから」といった理由は、チューイの帽子着用理由の中には挙げられていない。

このような帽子をはじめとする政府に強制された西洋式服飾に対して、老年女性たちはどのように対応したのだろうか。

積極的な反応としては、帽子需要を活用した経済的側面への参入が挙げられる。チョーイによれば、王宮内にも権勢のある女性王族がいなくなってしまうことにより、女官たちは経済的に苦しみ、王宮女官の

間でも帽子作りの内職が盛んになっていったという<sup>16</sup> [နဂုၢ်ၢ် 1953:1063、1114 - 1115、1117、1192]。

「帽子を縫って売りに出して文化を振興してるのよ。どう、あなた！」チョーイが言った。それから説明を続けた。「この頃じゃ、王宮内の誰もがみんな帽子を作って売ってるのよ。利益もよくてね。もう作って売るのが間に合わないくらいよ。警護女官たちも座り込んで竹を削ってのんびりと帽子を編んでいるわ。一枚売るだけでも何パーツにもなるのよ。私の方はそれだけの力とはとてもなく目も余り見えないんで、こんな簡単なものを作ってるの。私、プローイに上げようと思って一枚持ってきたの。どこかへ行くときにでも逮捕されないようにかぶってね」 [နဂုၢ်ၢ် 1953:1114]

しかし、帽子需要を経済的に利用しながらも、老年女性たちは単純に政府の服飾政策に従った訳ではなかった。チョーイは、完全に政府の政策に準拠した服飾でプローイの屋敷を訪ねてきたが、プローイの屋敷に入ると、次のような態度を見せる。

建物の脇で立ち止まって階段の上に荷物を置くと、帽子を脱いで包みの上に置き、チョーイはパー・トゥン<sup>17</sup>を体から外したのである。真昼間の開かれた場所で服を脱ぐというのが当たり前のものであるかのよう、何気ない表情であった。

プローイは頭がおかしくなるくらい驚いて、寒気が体を駆け巡った。叫びを上げようとしたとき、プローイはもう一度

二  
一  
四

16 チョーイも、1939年頃には香水を製造販売したり、僧衣の仕立てをしたりしていた [နဂုၢ်ၢ် 1953:1062-1063]。

チョーイを見やって、すぐに笑いだした。それから、自分とチョーイの滑稽さに涙が流れるほど笑わなければならなかった。なぜなら、パー・トゥンの内側に、以前のようにきちんともう一重、パー・チョンクラベーンを穿いて来ていたことが判ったからである。

チョーイは、政府の文化政策を、自分なりの機転で乗り越えていた。王宮からプローイの家に来る間は、帽子とパー・トゥンを着用していたのであったが、一旦安全なプローイの屋敷内に入ってしまうと、帽子を外した上に、パー・チョンクラベーンの上に重ねていたパー・トゥンを外してしまう。文字通り表面では政策に従っているように見せておきながら、実際にはその奥底で以前の習慣を固守していたのである。

王宮に戻るときには、チョーイはもう一度「文化的」な服飾に戻る。

午後になって、チョーイが王宮に戻っていく前、使用人の子供にサームローを呼びに行かせた間に、チョーイは道行き用の装いを始めた。つまり、パー・トゥンをもう一度パー・チョンクラベーンの上に着け、てきぱきと帽子をかぶったのである。

[สัมภาษณ์ 1953:1117]

チョーイは公的な場と私的な場とを明確に弁別し、それぞれ服飾を変えている。それは官憲の目をいかに逃れて自由な服飾生活をするかという問題の解決法であった。チョーイは、私的な場の装いと、官憲の目が届く公道上の装いとを巧みに使い分けながら、自分自身の服飾を守りつつ服飾政策にも抵触しないように生活していたのであった。チョーイはこうした振る舞いについて言う。

「私一人が気遣いなわけじゃないわ。他の人たちだって国中皆、似たり寄ったりよ」 [နဂုၵ်ၵ်း 1953:1113]

### 3、若年女性の服飾観と流行源の変化

『シー・ベンディン』の主人公プローイの末娘ブラパイは、1913年もしくは1914年の生まれである。プローイに似て美しいが、気性は激しい [နဂုၵ်ၵ်း 1953:412]。立憲革命後は人民党の兄アンを尊敬し、アンの上司であるセーウィーと結婚するが、日本軍の進駐後日本相手の商売によって巨富を得ようとする夫に反目する。

ブラパイも、若い娘として服飾にはかなり興味を持っている。1934年頃は、友人の家に遊びに行ったり、友人と映画を見にいったりするのに並んで、友人と服を買いに行くのも娯楽の一つであった [နဂုၵ်ၵ်း 1953:943]。当時流行していた「パーティー」に出席するときには、毎回服を仕立てるのに大騒ぎをする [နဂုၵ်ၵ်း 1953:944]。1934年から1938年にかけてのある日、ブラパイは自分の誕生パーティーを自宅で催し、次のような身なりで現われる。

ブラパイは、若さでつやの乗り切った肌に合った薄めのピンク色で身を飾り、パーマをかけた髪は顔立ちに似合っていた。 [နဂုၵ်ၵ်း 1953:947]

ブラパイが、遅くとも1938年までにはパーマをかけていたことが判る。一方、そこに招かれた客たちも、全員流行にそった整った身なりをしていた [နဂုၵ်ၵ်း 1953:948]。

服飾に多大の関心を払っていたブラパイは、1941年以降政府によって強要されていく帽子着用に際しても、母のプローイのように躊躇することはない。

二  
二  
二

ブラパイの方は、とくに興奮する様子もなく、いろいろな帽子をかぶってあちらこちらにいつも通り出歩いていた。流行の新型の帽子を選んだり、探し求めたりすることに専心しているようであった。そして常に(帽子を)かぶっているのだった。プロローイは「ブラパイは煩わしくないの？ 毎日帽子をかぶらなきゃいけない」と尋ねた。

「母上、全然煩わしくなんてありませんとも。皆が私の顔は帽子が似合っていて一層きれいに見えるって言うんです。ところで母上は、いつかぶってお試しになるの。私が見繕って持ってまいりますわ。私がかぶった帽子はまだたくさんあるんですよ」[Книжка 1953:1108]

ブラパイは帽子着用が煩わしいとか恥ずかしいと言うことなく、様々な帽子を数多く購入し所蔵していた。常に「流行の新型帽」を買い求めることに専心しているのだった。母プロローイにとっては、帽子は強制されて「かぶらなきゃいけない」ものであったが、ブラパイには帽子は強制されたものではなく、一層顔を引き立たせるために積極的に活用すべき道具であったのである。

この帽子着用という「悪業」に出会って、プロローイは若い頃の流行について回想している。

「昔は何によらず、みんな王宮の中から外に広まっていったわよね。服飾の話にしても、香水、食物、玩具にしても、王宮内で始めてから外側もそれについていったのよ。私たちが娘だった頃はいつも(王宮)外の人より先に何かをしたものだったわ。私たちの持ち物も、外の人たちより新しいものを持っていたものよ。いろいろな服や服飾品も、私たちが先に始めて、外



側もだんだんと全く同じになるように真似していったのよ。(…中略…)でも今は、私どこの人が模範を作り始めているのか判らないの。模範となる誰かを見ようとしても探し出すことはできないし、真似をしようと思っても私たちにはついていけないわ。昔とは本当に変わってしまったものね」[ສິຣິຣິດ 1953:1115-1117]

ブローイが若かった頃、すなわち1890年代や1900年代は、王宮が常に流行の発信地であった。服飾も王宮において流行が始まり、一般の人々は王宮女官の服飾をまねて流行を取り入れたのであった。しかし、王宮はすでに少数の老婆だけが住む、時代に取り残された空間になってしまっていた。ブローイには、1940年代前半における流行がどこから発信されているのか、よくわからない。

では、流行の発生源は、王宮を去ってどこに行ってしまったのだろうか。『シー・ペンディン』には明確な回答は用意されていない。政府がラジオを通じて帽子着用を呼びかけていたことが語られているのみである [ສິຣິຣິດ 1953:1109]。実際にピブーン政権がラジオ放送を宣伝の手段として活用していたことは、よく知られているところである。流行の発生源は、王権の象徴である王宮から、ピブーン政権を背後に擁するラジオへと移っていたわけである。若年女性はラジオのような新しいマスコミ機器を通じて流行情報に接し、自らの意思に従って、結果的に政府の示す方向性に則った服飾行動をとることになったように思われる。しかし、このような文化政策も、ピブーン政権が崩壊した1944年8月には終止符が打たれ、服飾政策も根拠を失い、無帽で歩いても咎められなくなる [ສິຣິຣິດ 1953:1202]。若年女性の間でさえ帽子の流行は定着することなく、結局帽子はタイに根付かないままに消え去っていったのだった。

## 結び

以上、『シー・ペンディン』に描かれた、ピブーン政権が強要した服飾に対する登場人物たちの意識について観察してきた。

1941年ごろには政府の「文化」政策は、服飾と密接に結び付けられて意識されるようになっていたように描写されている。とくに帽子着用は、服飾政策の中でも強調され、人々に意識される部分が大きかった。

こうした政策によって強要された服飾に対する意識は、年齢層によって大きく異なる。老年層の女性は、プロイのように既に1920年代にはパー・チョークラベーンに代えて巻スカート状のパー・シンを身につけている者もいたが、チョーイのようにパー・チョークラベーンを着用し続けている者もいた。政府のパー・チョークラベーン排除政策は、後者にとって特に精神的な打撃であった。公道においては官憲の取締を恐れてパー・トゥンを着用しながら、私的空間においてはパー・チョークラベーンを着用するというような対応が、『シー・ペンディン』には描かれている。政府の服飾政策と自己の服飾嗜好とを巧妙に統合していたといえる。一方で、帽子着用に関しては、洋装化が進んでいた老年女性にとっても洋装化に対応していなかった老年女性にとっても、等しく苦痛に感じられるものだった。「恥ずかしく」「煩わしく」「憂鬱」で、腹を抱えて笑われるほど奇異なものとして意識されていたように描写されている個所が多く見られた。老年女性にとって、帽子着用の唯一の長所は、美しさでも「文化」的であることでもなく、日除けになることでしかない。帽子選択の最重要条件は、着用していることを忘れるほど軽量であることや、風に吹き飛ばされないことである。いずれも政府の服飾政策に心ならずも従わざるをえない場合に、いかにその圧迫を軽微に抑えるかを主眼としているように見える。

そうした老年女性の消極的な意識に対して、すでに1930年代に洋装化

を果たしていた若年層の女性は、帽子の導入にも積極的である。それは、帽子着用が政府のいう「文化」であるからというよりは、ラジオを利用して政府が発信する流行に影響されながらではあっても、彼女たち自身の美意識によるものであった。

以上のように、『シー・ペンディン』には、政権が強要した服飾に対する若年層と老年層との世代間意識差がかなり大きかったように描かれている。これは、同時代の外国人の目を通して1930年代から40年代前半までの女性服飾の変化を跡付けた加納〔1999〕にまとめられている外見上の変化と軌を一にするものと考えられる。しかし、本稿で観察してきた女性たちの意識は、ピブーン政権に批判的であった王族クックリットの理解を経由したものでしかない。今後、当時の服飾観を物語る、より多くの叙述を見ていくことによって、より立体的な理解の端緒が得られるように努めていきたい。

## 引用文献

- คึกฤทธิ์ ปราโมช (クックリット・ブラモート) 2496 (1953) (2531 (1988) 版) *สี่แผ่นดิน* (シー・ペンディン) กรุงเทพฯ: สำนักพิมพ์สยามรัฐ (吉岡みね子訳 1980-1982 『王朝四代記』 1～4巻、井村文化事業社)

## 参考文献

- 平松秀樹 2008 「クックリット・ブラモート『シー・ペンディン（王朝四代記）』と“クンラサトリ”：タイ近代女子教育の日本との関わりとの考察とともに」『待兼山論叢』（文学編）42
- 加納寛 1999 「日本人の記録にみるバンコク女性服飾変化：1930-1944」『文明21』 2
- Mattani Moj dara Rutnin 1988 *Modern Thai Literature*. Bangkok: Thammasat University Press.
- 村嶋英治 2002 「タイ国の立憲革命期における文化とナショナリズム」『岩波

- 講座東南アジア史 7 植民地抵抗運動とナショナリズムの展開 岩波書店
- ・ ピヤワン・アサワラシヤン 2007 「ビブーン政権期 (1938 ~ 44) における服装政策」『アジア・アフリカ地域研究』6-2
  - ・ 高橋勝幸 2007 「タイにおける第二次大戦の記憶:自由タイ、『メナムの残照』、『王朝四代記』を中心に」『地球宇宙平和研究所所報』2
  - ・ 吉川敬子 1982 「『王朝四代記』に於ける文学と歴史」『東南アジア史学会会報』36
  - ・ กองวัฒนธรรม(文化部) 2503 (1960) *การแต่งกายของไทย (タイの服飾)* พระนคร กองวัฒนธรรม
  - ・ ศักดิ์สิทธิ์ ปราโมช (クックリット・ブラーモート) 2515 (1972) (2534 (1991) 再掲)  
“แม่พลอยมีตัวจริง?(プローイには本物がいる?) *วิเคราะห์ศึกษาศาสตร์พื้นถิ่นแผ่นดิน* (クックリット熟考シー・ベンディン細見) กรุงเทพฯ: สำนักพิมพ์ดอกหญ้า
  - ・ สายชล สัตยานุรักษ์ (サーイチョン・サッタヤーヌラク) 2550 (2007)  
*ศึกษาศาสตร์กับประวัติศาสตร์กรรม “ความเป็นไทย” 1,2 (クックリットと「タイらしさ」の創造 1、2)* กรุงเทพฯ: สำนักพิมพ์มติชน
  - ・ สุวดี อินประสิทธิ์พัฒนา (スワディー・タナプラシットパッタナー) 2536 (1993)  
*การแต่งกายสตรีกับหัตถกรรมทอผ้าในสังคมไทยสมัยรัตนโกสินทร์ (ラッタナコーシン時代タイ社会における女性服飾と織物業)* กรุงเทพฯ: สถาบันไทยศึกษา จุฬาลงกรณ์มหาวิทยาลัย
  - ・ สุวิทย์ ว่องวิระ (บรรณารักษ์) (スウィット・ウオンウィーラ編) 2534 (1991)  
*วิเคราะห์ศึกษาศาสตร์พื้นถิ่นแผ่นดิน* (クックリット熟考シー・ベンディン細見) กรุงเทพฯ: สำนักพิมพ์ดอกหญ้า
  - ・ เอนก นาวิกมูล (アネーク・ナーウィックムーン) 2547 (1982)  
*การแต่งกายสมัยรัตนโกสินทร์ (ラッタナコーシン時代の服飾)* กรุงเทพฯ: เมืองโบราณ